ウミガメの産卵

屋久島には二種類のウミガメ、アカウミガメとアオウミガメが上陸します。日本は北太平洋で唯一、この二種類のウミガメのうちでより多数のアカウミガメが産卵する場所であり、屋久島の浜辺は彼らの最大の産卵場所となっています。

なぜウミガメは屋久島を好むのか

アカウミガの子どもは屋久島の浜辺で孵化し、屋久島を通り過ぎて太平洋の北東へと流れる黒潮に乗って回遊します。メキシコのバハ・カリフォルニア沿岸は食料が豊富であり、多くのアカウミガメはそこに向かい、最終的には屋久島に産卵のために戻ってきます。すべてのメスのウミガメは交尾や産卵のために生まれた場所に戻るのに対し、オスのアカウミガメは一般的にそうではありません。

メスは五月から七月の産卵シーズンに屋久島の砂浜に卵を産み付けます。彼らは捕食者を避けるために夜に上陸し、砂に穴を掘り、卵を産み、その後 30 分あるいはそれ以上をかけて砂で穴を覆います。それぞれのメスは一度に約 100 から 150 の卵を産み、一シーズンには二から六クラッチ産卵します。卵は 45 日から 70 日後に孵化し、体長五センチほどの黒い子ガメが三日から七日後に砂地から現れて海へと向かいます。

ウミガメ保護活動

ウミガメは人間の活動によって絶滅の危機にさらされてきました。1950〜60 年代まで、カメはその甲羅で作られた装飾品のために大量に捕獲されていました。また、亀の卵は栄養素の含有量が高く、長寿や安産に良いと考えられていたため、日本では販売され、食べられてもいました。1970 年代以降は、乱獲と環境の悪化がウミガメの生息地をさらに脅かしました。

屋久島の北半分を占める旧上屋久町は、ウミガメを絶滅から守るため、1973 年にウミガメとその卵の捕獲を禁止しました。その後、鹿児島県は 1988 年にすべての沿岸部でウミガメとその卵の違法捕獲を禁止する条例を制定しました。2005 年の十一月には、永田浜（永田にある三つの浜の総称）が湿地に関するラムサール条約に登録され、永田に北太平洋で最も多くのアカウミガメの産卵地があり、このウミガメの生存に重要な地域であることが認められました。

屋久島うみがめ館は、屋久島のウミガメの生態調査と保護を目的とした非営利のセンターで、ウミガメの生態の観察および調査、浜の清掃、産卵巣のパトロール、およびボランティアの育成において重要な役割を担っています。研究グループやボランティアたちが、上陸してくるウミガメの数や産み付けられた卵の数を収集・監視しています。研究者たちはウミガメにタグを付け、その回遊経路を衛星で追跡しています。

ウミガメに会うには

カメは主に五つのエリアで産卵します。それらは永田の前浜といなか浜、一湊海水浴場、栗生浜、そして中間浜です。永田の浜辺は産卵活動を観察できる可能性が高いことから最も人気があります。

永田いなか浜

屋久島北西部の 1,000 メートルに及ぶこの浜は、島内で最も長い砂浜です。屋久島は日本に上陸するアカウミガメの 40 から 50 パーセントが上陸する場所で、そのうちの 90 パーセントが永田浜に上陸します。ウミガメを見られる可能性は五月中旬から六月にかけて最も高くなっています。訪問者がウミガメを見るには永田ウミガメ連絡協議会によって実施される「ウミガメ産卵観察ツアー（*ウミガメカンサツカイ*）」に参加する必要があり、事前予約が必要です。

屋久島うみがめ館

うみがめ館は前浜でウミガメの産卵観察会を実施しています。観察会は、観察の基本的なルールやウミガメの生態についてのオリエンテーションから始まります。参加者は次に英語字幕付きのビデオを見、その後産卵場所へと案内されます。参加者の人数は一日 50 名が上限となっており、事前予約が必要です。ウミガメのライフサイクルを詳しく説明した標本や写真、またパネルなどを展示する博物館（一部に英語を含む）が、年間を通して公開されています（十月から三月までの火曜および水曜、年末年始の祝日を除く）。入場は大人 300 円です。

栗生浜

永田に次いで二番目に大きいアカウミガメの産卵エリアは、屋久島南西部にあるこの浜です。栗生では観察会は実施されていませんが、この浜辺での活動を監視しているウミガメ監視員が観察者に注意点を説明してくれます。